

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

このことについて、10月の予察情報を送付します。

病虫害発生予報（10月）

令和5年9月29日
愛媛県

1 気象予報（高松地方气象台）

1か月予報（令和5年9月21日発表）の解説

向こう1か月の天候の見通し 四国地方（9月23日～10月22日）

【1か月の平均気温・降水量・日照時間】

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低 10 並 20 高 70% 高い見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。
特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

2 病虫害の発生予想

水 稲

(1) トビイロウンカ

（令和5年8月17日付け 病虫害防除技術情報（第3号）参照）

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、発生を確認していない。

(イ) 本虫による坪枯れ被害は、9月20日に南予の1圃場で確認されているが、昨年に比べ発生時期は遅い（昨年：9月上旬初確認）。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発生は圃場間差や圃場内での偏りがあるため、圃場全体を注意して見回り黄化症状などの変化を見逃さないよう注意する。

(イ) 定期防除後に黄化や坪枯れ症状がみられた場合は、農薬使用基準に留意し、早急に応急防除を実施する。

(ウ) 坪枯れ被害の発生圃場では、可能な限り収穫を早めて被害の拡大を防ぐ。

大 豆

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月の広域調査では、白変箇所数、平均食害度ともに平年並である。

(イ) 9月（1～4半旬）の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、地点によりばらつきがあり、9月上旬に平年を上回る急激な増加ピークを示す地点が7地点中2地点あったが、累計誘殺数は7地点中1地点で多、1地点でやや多、2地点で平年並、3地点で少～やや少、全体では平年並である。また、9月4半旬現在では、2地点で平年並、5地点で少で推移している。（病虫害防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 産卵は卵塊で行われ、ふ化後間もない幼虫は集団で葉を加害し、加害された葉は白変葉となる

- ので、発見次第処分する。
- (イ) 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が低下し、食害量も増加してくるので、若齢幼虫期の防除を心掛ける。
 - (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション使用を心掛ける。

(2) 吸実性カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月（1～4半旬）の予察灯によるミナミアオカメムシの誘殺数は、地点によりばらつきがあり、平年を上回る急激な増加ピークを示す地点が6地点中2地点あったが、累計誘殺数は6地点中2地点で多、1地点でやや多、3地点で少～やや少、全体では平年並である。また、9月4半旬現在では、3地点で多、2地点で平年並、1地点で少で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 莢伸長終期から子実肥大終期にかけて吸汁被害が多くなるので、防除は子実肥大期に10～15日間隔で2回程度実施する。

(イ) ミナミアオカメムシについては、特に10月以降、収穫終了後の普通期水稻からの移動により密度が高まることがあるので注意する。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、葉の発生は発病葉率、発病度ともに平年並、果実の発生は発病果率が平年並、発病度がやや多である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病枝葉は早期に除去し、園内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、薬剤散布や防風対策を講じる。

(ウ) ミカンハモグリガの食害痕は病原細菌の侵入箇所となるので、夏秋梢の除去、防除を徹底する。

(エ) 本病に罹病性の品種は、夏秋梢や果実の発病に特に注意する。

(2) 褐色腐敗病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、発生を確認していない。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の排水や通風を良くする。

(イ) 敷きワラやマルチなどで、雨水による病原菌の跳ね上がりを防ぐ。

(ウ) 発病果は二次伝染の原因となるので、発見次第園外で適切に処分する。

(エ) 発生してからでは十分な効果が得られないので、発生前（降雨前）に防除する。

(3) 貯蔵病害（緑かび病・青かび病）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 果実品質は、極早生品種では糖度・酸度ともにやや低い、早生品種では糖度はやや高い、酸度は平年並、普通品種では糖度はやや高い、酸度は低い傾向である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 果実は、収穫時に果皮を傷つけないよう丁寧に取り扱う。また、降雨直後など果面が濡れている場合には収穫しない。

(イ) 収穫後の予措、貯蔵中の温湿度管理を適正に行い、腐敗果は発見次第除去する。

(ウ) 収穫の1～2週間前に薬剤散布を必ず行う。

(4) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、寄生葉率、1葉当たり雌成虫数ともに平年並である。

- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。
- (イ) 秋季は果実や葉裏への寄生が増加するので、薬剤はかけむらのないよう丁寧に散布する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、果実の発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地観察に努め、発病枝及び発病果実は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) 果実の感受性が高まる時期となるので、常発地では定期防除に努め、天候不順が続けば追加防除を実施する。

果樹共通 (かんきつ、かき、なし、キウイフルーツ)

(1) 果樹カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 9月(1～4半旬)の予察灯による誘殺数は、地点によりばらつきがあり、累計誘殺数は7地点中1地点でやや多、2地点で平年並、4地点で少～やや少、全体ではやや少である(病害虫防除所ホームページ掲載データ参照)。

(イ) 9月(1～4半旬)の集合フェロモントラップによる誘殺数は、5地点中3地点でやや増加傾向ではあるが、5地点とも少である(病害虫防除所ホームページ掲載データ参照)。

(ウ) 県内11地点(9月中旬調査)のヒノキ球果の結実量は多い(下表参照)。

(エ) ヒノキ球果のカメムシ類寄生虫数調査(10回掬い取り)では、平均捕獲虫数は4.4頭/地点であり、平年に比べやや多い(平年2.5頭)(下表参照)。

(オ) 山林からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は、平均5.9個/球果であり、平年に比べやや少なく(平年12.1個)、過去10年と比べて2番目に少ない。また、新成虫がヒノキを離脱する25個/球果に達している地点は確認されていない(下表参照)。

(カ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的であるが、球果の結実量が多く、口針鞘数が少ないことから、園地飛来時期は遅くなることが予想される。

ウ 防除上の注意

(ア) ヒノキ球果量、ヒノキ球果のカメムシ類寄生虫数が多いことから、台風等の通過後、一時的に果樹園への飛来が増加する場合があるので注意する。

(イ) 飛来は地域、園地により偏ることがあるため、園地観察に努め、飛来初期に防除を行う。

(ウ) 収穫期が間近となる果樹では薬剤の選択に注意する。

表 ヒノキ球果調査結果(2023年9月調査)

調査地	結実量	10回すくい取り虫数						虫数合計	口針鞘数/ ヒノキ1球果
		チャハネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	多	0	2	0	0	0	1	3	1.9
西条市丹原町田滝	中	4	0	0	0	0	0	4	11.3
今治市大西町脇	やや多	6	0	0	0	1	0	7	10.6
松山市立岩	極多	3	0	0	0	0	0	3	1.3
松山市菅沢	極多	1	0	0	0	1	0	2	14.2
松山市久谷	多	7	1	1	0	1	1	11	18.0
久万高原町明神	やや多	0	0	0	0	0	0	0	3.8
内子町五十崎	極多	0	1	1	0	1	0	3	1.6
西予市城川町土居	多	1	1	0	0	0	0	2	0.8
西予市宇和町西山田	極多	0	12	0	0	0	0	12	1.4
愛南町城辺緑	極多	0	1	0	0	0	0	1	0.7
虫数平均(R5)		2.0	1.6	0.2	0.0	0.4	0.2	4.4	5.9
平年値(H25～R4)		1.6	0.6	0.2	0.0	0.0	0.1	2.5	12.1
今年の順位(過去10年との比較)		5	2	4	8	1	2	3	10

野 菜

(1) アブラムシ類 (いちご、冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、夏秋なすでやや多、夏秋きゅうりでやや少の発生である。

(イ) 9月(1～4半旬)の黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの累計誘殺数は、地点によりばらつきがあり、3地点中1地点で平年に比べ多、1地点でやや少、1地点で昨年に比べやや少、全体ではやや多である(病虫害防除所ホームページ掲載データ参照)。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) いちごではミツバチや天敵類への影響を考慮し、薬剤を選定する。

(2) ハダニ類 (いちご、冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、さといもで並、夏秋なすで少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 同一薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) ハダニ類は雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草に努める。

(エ) いちごではミツバチや天敵類への影響を考慮し、薬剤を選定する。

(3) ハスモンヨトウ (いちご、冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月上・中旬の定点調査では、さといもの食害面積率、寄生虫数ともに平年並の発生である。また、いちご育苗床・本圃の広域調査で発生を確認している。

(イ) 9月(1～4半旬)の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、地点によりばらつきがあり、9月上旬に平年を上回る急激な増加ピークを示す地点が7地点中2地点あったが、累計誘殺数は7地点中1地点で多、1地点でやや多、2地点で平年並、3地点で少～やや少、全体では平年並である。また、9月4半旬現在では、2地点で平年並、5地点で少で推移している。(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(イ) いちごでは、卵塊やふ化後間もない幼虫の集団加害葉を発見次第除去し、適切に処分する。また、ハウス開口部からの成虫の侵入を抑制するため、防虫ネットを設置する。

(ウ) 農薬使用に当たっては、作物ごとの登録を確認し、同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション使用を心掛ける。

(4) オオタバコガ (冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月(1～4半旬)の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、地点によりばらつきがあり、9月上旬に平年を上回る急激な増加ピークを示す地点が5地点中2地点あったが、累計誘殺数は5地点中2地点で多、1地点でやや多、2地点で少～やや少、全体では平年並である。また、9月4半旬現在では、2地点で多～やや多、3地点で少～やや少で推移している(病虫害防除所ホームページの調査データを参照)。

(イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(5) シロイチモジヨトウ (冬春野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 9月(1～4半旬)の性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は、地点によりばらつきがあり、9月上旬に平年を上回る急激な増加ピークを示す地点が5地点中2地点あったが、累計誘殺数は5地点中2地点で多、2地点で平年並、1地点でやや少、全体ではやや多である。また、

9月4半旬現在では、1地点で多、1地点で平年並、3地点で少で推移している（病害虫防除所ホームページの調査データを参照）。

(イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報・各種調査データ】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。